

フィールド研究者との コラボレーション

映画『動いている庭』の制作をきっかけに、2016年以降、主にヨーロッパ・アジア・アフリカで、総合地球環境学研究所の研究者たちのフィールド調査に同行し、彼らの視点を介して、多様な暮らしのあり方を記録した映像作品を制作してきた。トヨタ財団の個人研究助成を受けた個人研究では、「暮らしの目線」からフィールド研究の感性を映像で記録し、その記録した映像素材を基にして、学際的な研究の表現形を探究した(2017年5月～2019年4月)。この個人研究の成果として、2018年4月に研究者たちと一般社団法人リビング・モンタージュを設立、代表理事に就任した。撮影した映像素材を活かすため、学際的活用の基盤となるプラットフォーム「暮らしのモンタージュ」を創設する(図1)。

同年2018年4月には、個人研究の成果をより深く探究するために、京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期)課程に進学し、3年間に渡る研鑽の後、博士号を取得した。このあいだ、2019年には、交換留学制度を利用し、英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)の博士課程(School of Arts & Humanities)に約3ヶ月間滞在し、研究を深めた。博士論文の題目は、『暮らしのモンタージュ：フィールドの「余白」とくあいのまなざし』から生まれる方法』である。

博士課程の研究では、アジア・アフリカ各地でフィールド調査を行う人類学者や農学者らの協力のもと、彼ら研究者の活動を記録した映像制作を行い、彼らの主たる研究内容だけでなく、そこでこぼれ落ちてしまう「余白」的なものも含めて、映像メディアの使い方を工夫した独自の創造性を追求した。「言語表現を超えた何ものか」を記録する映像メディアの特徴を活かし、独自に検討した「くあいのまなざし」から生まれる方法によって制作されたのが、映像作品『#まなざしのかたち』(124分、2021年制作)である。本作は、農学者・田中樹と文化人類学者・清水貴夫の調査地における様々な人間活動を記録した映像を基にし、あえてはっきりとした物語や主題にまともならないような断片的なことからして編集した可変的な映像作品である。

これまでの活動を振り返ると、澤崎が扱う表現メディアは、映像を中心に、写真、インスタレーション、詩／散文、論文など多様で、表現空間も展覧会、映画館、ウェブ、研究会、学術誌など、領域横断的である。これら諸活動は、「芸術」や「学術」といった特定の領域に縛られない自由なもので、物理的にも思想的にも様々な領域を「移動する」ことの中に「暮らし」と映像作品との緊張関係を捉えようとするものである。こうした他に例を見ない独自の芸術／社会実践の基盤となる「暮らしのモンタージュ」とは、何かの目的のために映像を鑑賞するのではなく、映像という仕組みを使って何かを考えようとするための「場所」を見出そうとする試みである。

以上、これまでの制作活動について、概略を紹介してきた。近年の活動の関心の中心をまとめると、

1. フィールド研究などの専門的な視点と、その専門的な視点があるからこそ際立つ「余白(=暮らしの中に垣間見られる知恵や工夫や驚きなど)」に着眼する
2. 「言語表現を超えた何ものか」を記録する映像メディアの特性を活かし、くあいのまなざしから生まれる方法によって、フィールドの「余白」的なものも含めた独自の創造性を追求する

以降の紙面では、1.で語られるフィールド研究の「余白」にあるものの可能性について触れていただくために、田中樹ほか編『エッセイ集 フィールドで出会う風と土と人6』(摂南大学、2021年)に掲載された「フィールドの「余白」にあるもの」というエッセイを紹介したい。また、査読付きの論文誌という性格上、専門性の高いテキストにはなるが、対話型学術誌『といとうい 第0号』(京都大学学際融合教育研究推進センター、2021年)に掲載された論考「暮らしのモンタージュ—フィールド研究の余白—」も紹介したい。この論考は、博士課程での研究内容を短く整理したもので、映像作品『#まなざしのかたち』を中心とした展覧会の具体的な内容を検討するにあたって、基盤となる考えが述べられている。ぜひとも触れていただきたい。

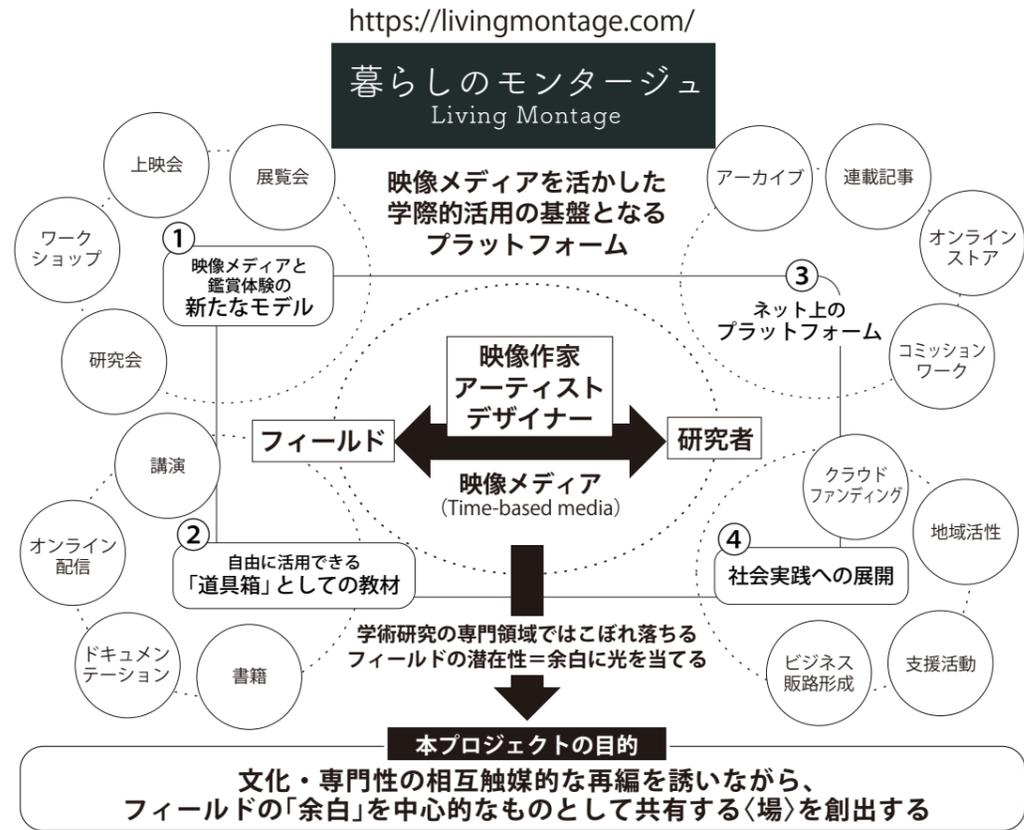


図30: 「暮らしのモンタージュ」全体図

澤崎賢一「フィールドの「余白」にあるもの」

田中樹・宮寄英寿・石本雄大編

『エッセイ集 フィールドで出会う風と土と人6』、摂南大学、2021、pp.27-32



澤崎は、アカデミックな文脈では研究成果の「余白」として周縁に位置づけられやすいフィールドの「潜在性」を映像メディアによって記録し、その可能性を学術メディアとは別の視点からの鑑賞や評価の対象として共有する。この「潜在性」とは、暮らしの中に垣間見られる知恵や工夫や驚きのようなものである。つまり、これからの社会をかたち作っていくためには、そういったとりとめもない暮らしの中での知恵や工夫や驚きがとても大切になるのではないか。

学術研究のフォーマットから こぼれ落ちる「余白」的なもの

僕は近年、「暮らしのモンタージュ」というプラットフォーム上で、様々な研究者のフィールド調査の過程を映像や写真で記録している。アフリカ、アジア、日本各地など、訪れる場所は多いが、それぞれの調査地を訪れる回数は少なく、数回フィールド調査を記録したくらいでは、個々の研究者の研究内容を深く理解することは難しい。

けれども、僕が同行した多くの研究者たちのあいだでひとつだけ共有されていたことがある。それは、研究に直接関係していなくとも、フィールドには豊かな出会いや出来事が溢れていて、そういった出会いや出来事における気づきや閃きの多くは論文を中心とした研究成果では殆どこぼれ落ちてしまい、共有することができない。しかし、そのこぼれ落ちるものの中には、研究を深めるための潜在的な可能性を秘めているものがあるのではないかと、ということである。

もちろん、今日の映像人類学の動向などを鑑みても分かるように、すべての研究成果が「論文」というフォーマットに集約されるものではない。しかし少なくとも、僕が同行した研究者たちは、彼ら／彼女らの学術研究のフォーマットからはこぼれ落ちてしまう「余白」的なものへの関心がある。だからこそ、まったくの門外漢であるにも関わらず、僕のような映像作家が調査に関わることができたのである。

置き換えることのできない撮影体験

研究者にとって「余白」にあるものへの関心が高まっているが、僕にとっては、そのフィールドでの「余白」=フィールドでの撮影体験は、僕の人生の方向性を大きく左右するほどに豊かな可能性を秘めているように思われた。だから僕は、フィールドにおける学術研究のプロセスからこぼれ落ちていく何かを、むしろ中心的なものとして扱うことができるような方法はあるまいかと思索し、具体的な実践へと活動の幅を広げていくことになる。

最初のケニア訪問からして既に、フィールドでの撮影体験は「余白」や「中心」といったものを超えた置き換えられない大切なものとなっている。今回は、その最初のケニア訪問での出来事を綴りたいと思う。この置き換えることのできない撮影体験を他者と共有するために、フィールドでの「余白」を中心化するための映像メディアの活用方法の探求が、ますます僕の関心の中心に存在するようになっていった。

初めてのアフリカ、ケニアのオルカリア

僕にとって最初の大きな経験は、「アフリカ」を知ったことであった。農学者の田中樹さんと初めて訪れたケニアは、滞在期間が5日間程度ととても短い撮影ではあったが、今にいたるまで何度も僕の頭の中に訪問



写真31: マサイのジェレミー(筆者撮影)